

第 2 回  
愛 川 町 総 合 教 育 会 議

平成 2 7 年 1 2 月 1 2 日

## 第2回愛川町総合教育会議 会議録

- 1 会議日程 平成27年12月12日(土)  
午前10時00分から午前11時37分
- 2 会議場所 愛川町文化会館3階会議室
- 3 議 題 (1) 本町の青少年教育の現状とこれから  
ア 児童生徒数の推移について  
イ 子ども会の状況  
ウ 町の青少年事業の取組み  
エ これからの青少年教育に向けて  
(2) その他
- 4 出席者 町長 小野澤 豊  
教育長 佐藤 照明  
教育委員(教育長職務代理者) 平田 明美  
教育委員 榮利 隆一  
教育委員 梅澤 秋久  
教育委員 井上 正博
- 5 事務局 教育次長 佐藤 隆男  
教育総務課長 山田 正文  
生涯学習課長 片岡 由美  
教育開発センター指導主事 井上 真彰  
指導室指導主事 前盛 朋樹  
指導室指導主事 板橋 康史  
生涯学習課主幹(社会教育主事) 茅 泰幸  
生涯学習課副主幹(社会教育主事) 瀧 善典

---

◎開会

- （山田教育総務課長） それでは、定刻となりましたので、ただいまから第2回愛川町総合教育会議を開催いたします。

進行を務めさせていただきます教育総務課長の山田です。どうぞよろしくお願ひいたします。

- 
- （山田教育総務課長） それでは、開会に当たりまして小野澤町長からご挨拶を申し上げます。

- （小野澤町長） 今日は第2回目となります総合教育会議にお集まりをいただきましてありがとうございます。そして、傍聴の皆さんにも早朝よりお出かけをいただきましてありがとうございます。

また、教育委員の皆様方におかれましては、日ごろ愛川町の教育はもちろんのこと、町政の各般にわたっていろいろとご理解、そしてお力添えをいただいておりますこと、この場をおかりし、お礼を申し上げる次第でございます。

そして、ご案内のように、10月28日付けで新たに佐藤教育長を迎えたわけでございます。新教育長には、新しい教育委員会制度における初めての教育長ということでございまして、いろいろとご苦労もあろうかと思ひますけれども、これまでの豊富な経験を生かしていただきまして、愛川町の教育のためにご尽力いただきますようお願いを申し上げる次第でございます。

さて、本日は第2回目の総合教育会議となるわけでございますが、第1回目につきましては、「学校教育」をテーマに話し合いをさせていただいたところでございます。本日は第2回ということで「社会教育」の分野について皆さんと意見交換をしていこうということでございます。

社会教育といいましても、青少年教育を初めとして、スポーツ、文化、さらには生涯学習などいろいろと幅広いものでございますので、今日はその中でも「青少年教育」をテーマとして取り上げをさせていただきたいと思ひます。委員の皆様にはぜひ忌憚のないご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひをいたします。

私もこの会議に臨むに当たり、昨日ちょっとパソコンを開いて、青少年の範囲というのは

どこなのかなということで、いろいろと見させていただきました。県条例ではいろいろとございますけれども、18歳未満とか、6歳以上18歳未満とかそれぞれの県でもいろいろその対象の範囲が違っております。さらには、民法では未成年者、これは二十未満ということでございますし、いろいろその年齢範囲というのは定めが違っていているわけがございますけれども、行政においては青少年は若い人を最も幅広い年齢層で捉えている言葉でありまして、それだけに抽象度が高いのかなと、曖昧な使われ方もしている部分もあるのかなと、そんなふうに感じたところでございます。その辺も含めまして今日はざっくばらんにいろんな皆さんとお話をさせていただき、そして、これからの町の青少年教育に役立てていきたいなと、そんなふうに思っていますので、よろしく願いをいたします。

○（山田教育総務課長） ありがとうございます。

続きまして、佐藤教育長、お願いいたします。

○（佐藤教育長） 皆さん、おはようございます。

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

日ごろから教育行政について皆様方の特段のご配慮、ご支援でこの教育委員会の教育行政がスムーズにできていますことを、この場をおかりしてお礼を申し上げたいと思います。

ちょうど教育長に就任しまして45日が終わりました。9月まで中学校現場で仕事をしておりまして、教育委員会に来て自分がこの生まれ育った愛川町で仕事ができるということで、すごくうれしく思っておりますけれども、この45日間、非常に目まぐるしい忙しさの中で、教育長の仕事をしてきました。やはり愛川町のすばらしいところ、いろんな自然に恵まれていたり郷土資料館があったりとか、さまざまな愛川町のよい部分を教育行政の中で生かしながら仕事ができるというふうにも思いました。

小中学校9校を訪問させていただきましたが、今各学校で学力の向上の問題や安心安全な教育環境の整備、いじめ防止についての対策とかさまざまな課題を抱えている中で、校長先生を中心として一生懸命に学校経営を進めていただいていることに、本当に感謝を申し上げたいと思っております。

そういう中で、この総合教育会議、今回は第2回目ということになりましたけれども、町長と、そして教育委員会との話し合いの中で、より一層連携をしながら教育行政を進めていくことができたらと思っております。

また、これまで以上に一層連携をしながら教育行政を進めることができるということが大変うれしく思っています。今後ともどうか教育行政が推進できますように、より一層の連携

を通して進めていければと思っております。また、今日のこの場がそういう場になることを祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○（山田教育総務課長） ありがとうございます。

続きまして、本日の議題に入らせていただきますが、ここから議事の進行につきましては議長を小野澤町長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

---

○（小野澤議長） それでは、議長の職を務めさせていただきます。

それでは早速、議題のほうに入らせていただきます。

まず、（１）の本町の青少年教育の現状と、そしてこれからということについて事務局から説明をお願いいたします。

○（瀧生涯学習課副主幹） それでは、本町の青少年教育の現状とこれからについて説明いたします。

スライドにありますように、ア、児童生徒数の推移、イ、子ども会の状況、ウ、町の青少年事業の取組み、エ、これからの青少年教育に向けての中にお話しさせていただきます。

初めに、児童生徒数の推移ですが、小学校では昭和57年度、中学校では昭和61年度がピークで、そこからともに緩やかな減少傾向にあります。小学校別に見ていきましても、昭和57年度に菅原小学校が開校した以降は、若干の時期の違いはありますが、どの学校も減少傾向になっております。中学校についても昭和61年度に愛川中原中学校が開校した後は、各校減少に転じております。今後も緩やかな減少傾向が見込まれているところであります。

次に、本町の子ども会の状況について説明いたします。

初めに、単位子ども会の数ですが、平成7年に61あった子ども会が平成27年では29まで減少しています。特に平成16年ごろまでは急激な減少となっており、その後はほぼ横ばいの状況となっております。

続きまして、児童数と子ども会の加入児童数ですが、平成7年はほとんどの子供が子ども会に加入していましたが、平成27年半分程度の加入率となっております。少子化に伴い、児童数が減少したことに加え、子ども会に加入しない児童がふえてきたことにより、地域や周りの人とかかわる機会が減ってきていることがうかがえます。塾や習いごとなど、子供の学校外での生活の仕方が多様になってきたこと、情報化が進み一人でも過ごせる生活スタイルが可能になってきたことなどにより、今後さらに社会性や協調性を育む機会が減少していくことが懸念されているところであります。

それでは、これらの状況を踏まえまして本町の青少年事業の取り組みを紹介させていただきます。前半は青少年関連の行事を、後半は児童の放課後活動の支援について、2つの枠組みに分けて幾つかの取り組みを紹介させていただきます。今回は、地域に関係する行事を中心に紹介させていただきます。

初めに、ふれあいレクリエーションです。

小学校1年生から6年生までの児童と高齢者との触れ合いを図ることを目的としまして、愛子連、老人会、学校、育成会などの地域の皆さんが中心となり、11月の第2土曜日を「子ども会の日」と定め、町内の各小学校で開催しております。

内容としましては、誰もが楽しめるようなスポーツ・レクリエーションを体験することができますが、自転車安全教室、防災体験、模擬店やバザーを開催する学校もあります。

重立った内容を紹介します。まず、高齢者が子供たちに昔の遊びを教える遊びコーナーです。写真は駒回しとけん玉を体験している様子になります。次に、スポーツコーナーです。ペタンク協会の指導によりますペタンクを親子で楽しんでいるところがございます。こちらは、クラフトコーナーです。指編みでマフラーづくり挑戦している様子です。また、ふれあいレクリエーションはジュニアリーダーの活躍の場にもなっておりまして、ゲーム指導など和やかな雰囲気づくりに一役買ってくれております。

それでは、ジュニアリーダーの活動につきまして紹介させていただきます。初めに、メンバー構成ですが、現在中学生と高校生で組織するジュニアリーダーが22名、インリーダーと呼ばれる小学五・六年生が12名、18歳以上のシニアリーダーが1名の計35名で登録しております。

次に、主な活動ですが、単位子ども会における行事の指導やお手伝い、わくわくホリデープランというジュニアリーダー主催のイベントの企画、運営、さらにはジュニアリーダーの研修会に参加しております。

こちらの写真は、子ども会から派遣を要請され、地域のクリスマス会でゲームを指導している様子です。こちらは、わくわくホリデープラン親子カヌー教室です。ジュニアリーダー企画、運営のもと参加者は親子でカヌーを楽しみます。こちらは、ジュニアリーダー・インリーダー研修会の様子です。町青少年指導員連絡協議会主催の1泊2日の研修会に参加しました。写真はピザづくりに挑戦しているところですが、どの子も無事焼き上げ、おいしくいただきました。

次に、青少年県外交流事業についてご紹介します。

本事業は、グループでの体験活動を通して、互いに助け合うことの大切さを実感させ、社会性を学ばせることを目的としております。8月の第1土曜日に行われる、友好都市である長野県立科町のえんでこ祭りに合わせて実施している2泊3日の交流事業です。参加者は町内の中学1・2年生30名、立科町からは10名ほどの参加があり、青少年指導員、中学校教諭、ジュニアリーダーなどの指導のもと、立科えんでこ、そば打ち体験、キャンプファイアー、奉仕活動などを行いました。本年度で22回目を迎え、これまでに延べ1,322人が参加しております。

こちらは、1日目の立科えんでこでの参加の様子です。立科町の方々からの温かな声かけもあり、楽しくお祭りに参加しております。2日目は、そば打ち体験をグループで協力して行いました。また、夜はキャンプファイアーで親睦を深めました。立科町との交流はもちろん、愛川町の参加者同士の交流も深まっていきました。3日目は、宿泊先周辺の美化清掃を行い、立科町を後にしましたが、全ての活動をグループで協力しながら行うことで、本事業の目的である社会性を育むことができたのではないかと考えます。参加者の感想文からも、事業の成果を実感しております。

以上のように、青少年が地域とかかわり、また多くの方にご支援をいただきながら青少年の健全育成を目指し、多様な取り組みを展開しております。

続きまして、児童の放課後活動の支援として、かわせみ広場と放課後児童クラブを紹介します。

最初に、かわせみ広場についてご紹介します。

かわせみ広場は、放課後の安全安心な遊び場として、地域における異なる年齢の児童の交流を促進し、連帯性、協調性、責任感を養うことを目的としております。町内の児童館や地域公民館14カ所で小学1年生から6年生を対象に実施しております。各施設に指導員を一、二名ずつ配置し、平成26年度は延べ2万4,105人の児童が利用しております。

かわせみ広場は、放課後学校から一度帰宅した児童が自由に遊ぶ場所です。児童は受付に名前、学年、連絡先などを書き、指導員の見守りのもと施設内で過ごします。施設ごとに遊びの工夫があり、児童の過ごし方もさまざまです。また、人数もメンバーもさまざまで、異年齢の児童が交流できるメリットがあります。

次に、放課後児童クラブについてご紹介します。

放課後児童クラブは、放課後に共働き家庭などの小学生を預かる場所として、適切な遊びや生活の仕方を指導することにより、事業の健全な育成を図ることを目的としております。

町内の小学校6校で小学1年生から3年生を対象に実施しております。各施設に指導員を二、三名ずつ配置し、半原・田代・高峰・中津第二児童クラブは定員35名、中津・菅原児童クラブは定員40名で受け入れを行っております。

放課後児童クラブは、事前に登録している児童が授業終了後に直接施設に行き過ごす場所です。各児童クラブで日課に違いはありますが、共通しておやつ、外遊び、学習、自由遊びの時間を設けております。

2つの事業の違いを表にまとめましたので、ごらんください。かわせみ広場は文部科学省が進める放課後子供教室という事業になります。一方、放課後児童クラブは厚生労働省が進めている事業です。先ほどの説明と重なるところがございますが、かわせみ広場の趣旨は安全安心な遊び場、放課後児童クラブは適切な遊びや生活指導の場であります。かわせみ広場の対象は1年生から6年生で登録は不要となっております。放課後児童クラブは、1年生から3年生で登録が必要となります。かわせみ広場は、平日の午後3時から5時まで、放課後児童クラブは平日の放課後から午後6時30分、土曜日は午前8時30分から午後6時30分までの開所となっております。

かわせみ広場では、地域の児童館、公民館で実施しております、一度帰宅してから遊びに行きます。利用料は無料です。一方、放課後児童クラブは校内の専用教室及び専用施設で実施していて、学校から直接行きます。こちらは育成料が必要になります。指導員の役割についても違いがありまして、かわせみ広場は安全管理、見守りを、放課後児童クラブは安全管理、生活や遊びの指導になっています。

以上、本町の青少年教育の重立った事業を紹介させていただきました。

最後に、これからの青少年教育に向けた取り組みについてです。2つの視点を上げました。

1つ目は、青少年活動を通じた、他者とかかわる機会の充実です。先ほどの説明でも申し上げましたが、子供たちの生活のスタイルが変わってくる中で、社会性、協調性を育むことは社会全体で取り組む必要があると考えます。各地域で、さまざまな行事が実施されておりますが、青少年指導員、子ども会、育成会、学校、PTAなどがさらに連携することにより、多くの大人たちが子供たちにかかわれるよう推進していきます。

2つ目は、放課後の子供の居場所のさらなる充実。かわせみ広場、放課後児童クラブのそれぞれの取り組みは先ほど紹介したとおりですが、2つの居場所が連携した取り組みを考えていきます。国の放課後子ども総合プランを参考にお示ししますが、本町でいうかわせみ広場と放課後児童クラブの連携による共通のプログラムの提供を国でも推奨しています。



以上のように、青少年教育を通して教育大綱に掲げた理念に基づく本町の目指す人間像に迫るための取り組みを推進したいと考えています。

説明は以上です。

- （小野澤議長） ただいま事務局のほうから本町の青少年教育の現況とこれからということで、児童生徒数の推移とか子ども会の状況、そして町の青少年事業の取組み、これからの青少年教育に向けてということで縷々、説明がされたわけでございます。

そういった中で、子ども会の数が大分減ってきているというのかなというような、私はそんな感じを受けたわけでございます。この表を見てみましても、平成7年から27年の推移を記述がされておりますけれども、大分少ないなと感じております。私が育ってきたころは、子ども会は各地域でいろいろたくさんありまして、そこが地域の子供たちの中心になっていたわけですね。そうした中で、しつけとか人間形成とか、いろんなことがそうした中で生まれ、さらには近所の人とか親戚とか、そうした中で青少年育成がされたきたのかなと、そんなふうに振り返っておりますけれども、それだけに地域社会のこのかわりは大事なのかなと、そんなふうに感じているところでございます。

子ども会の数が平成27年では児童数が2,084人いて、加入児童がそのうちの936人ということで、子ども会の数は29団体ということでございます。これはあれか、昔はもっとこれは7年からだけれども、もっと以前は子ども会の数というのは相当あったんでしょう。

- （瀧生涯学習課副主幹） 私どもで持っているデータとしては、平成7年が一番古いデータとして持っているんですけれども、そのころはほぼ皆様が子ども会のほうに加入していただいていたという状況になっております。

- （小野澤議長） すみませんね、いきなり振ってしまっ。

- （瀧生涯学習課副主幹） いいえ、いいえ。

- （小野澤議長） 何か皆さんのほうでいろいろ感じたことがあればお願いをしたいと思いませんけれどもね。

平田委員さん、どうぞ。

- （平田教育委員） それでは、質問させていただきます。

先ほど子ども会活動ということで、いろいろお話があったんですけれども、私どもも子ども会に加入していたころは、町長もおっしゃったとおり、ほとんどみんなで町を挙げてじゃないんですけれども、地域挙げての子ども会活動の参加、おじいちゃんもおばあちゃんも極端な話、していた当初も、昭和何十年でしょうか、そのときはございました。それから比べ

ますと、今の子供たちの生活スタイルというものがいろんな意味で変わってきているのが現状なんですね。そういう意味では、これからも変わり果てていく愛川町の子ども会のこういう体制としては、これからどのように町長は考えていらっしゃるのか、またそういうふうになってしまった、変わってしまった要因というのはどこにあるかということ、ちょっと教えていただきたいんですけども。

- （小野澤議長） 今、平田委員さんのほうからいろいろお話がございましたけれども、確かに子どもたちのライフスタイル、これはもう全く昔と違うわけでございます。先ほども説明の中でありましたけれども、塾通いとか、それで忙しいとかね、さらには情報機器が日進月歩で変わっていつている。そういう環境の中で生活をしていくということで、大分子供たちが、私なんかの子供のときともう全然違いますからね、そうした関係も違ってきているのかなと思っております。

一方では、子ども会の加入については、大人の価値観の多様化といいたいでしょうか、よく一般的には言われますけれども、その加入については子供本人の意思ではなくて、親の都合もあるのかなと私は思っております。親が地域に余り縛られたくないとかね、煩わしさから逃れたいとか、そして子ども会に入るといづれ役員が回ってくるから、子ども会には入りたくないとかね、そういった理由によって子ども会、これが減少している要因の一つなのかなと感じております。

そしてこの社会構造を見ると、少子化とか核家族化、そして生活様式も変化、いろいろ社会変化の激しい時代の中で、地域社会の機能低下、これが家庭とか地域の教育力の低下にもつながっているのかなというふうにも感じております。答えになっているかわかりませんが、私はそんなことで今お答えをさせていただきました。

- （平田教育委員） ありがとうございます。

では、この時代とともに変わっていく子ども会のこの流れというんですか、教育長のほうのお考えとしては、解決の手だてというのはどのように、子供たちが楽しく子ども会を、昔の子ども会に戻すというのは、これは無理だと思うんですが、少しでもこの子供たちが子ども会に地域に根差してという角度での方向に行くような解決の手だてがあったらお答えいただきたいです。よろしくをお願いします。

- （佐藤教育長） 難しい質問だというふうに思いますけれども、私は10年近く前に愛子連の理事をさせていただいております、ちょうどそのころ中津地区というのは10あって、そのうちの3つが、もう人数が少なくなって子ども会をなくしたいという意向がちょうどあった

時代だったんですね。それを何とか存続してほしいということで、一生懸命働きかけをさせていただいたのをちょっと思い出したんですけれども、やっぱり子ども会の中身も変えていかなければならないだろうと、当時そのころみんなで話し合った経緯がありました。魅力ある子ども会の運営というんでしょうかね、今の子供たちって意外と好きなこととか魅力あることには積極的に取り組んでいくというところがありますので、やはりいろんな工夫をして、その中で子ども会に加入できるように、子供のまず意思を尊重させるような形で進めていくことが大事なのかなというふうに、そう思いました。

やはり、今こういう現状の中で子ども会の何とか維持を、この10年間を見ると先ほどの数値を見ると、平成16年ぐらいからはそんなに子ども会のトータル的には変わっていないような気がするんですが、加入率的にはかなり減ってきているという状況なんかがありますので、そういうものを見たときに、やはり今町長さんが言われましたように、自治会の加入率が随分減ってきているというのもあるので、やっぱり親の意識というのは変えていく必要があるのかなというふうに思います。子供同士で関わるということがやっぱり大事なんだろうというふうに思うんです。ですから、そういう場をしっかりと確保していくということは、大事なことだと思いますので、そういうことを考えると、そういう町全体で子ども会というそういう一つの団体に対する意識的なそういうものに加入しようよというような、そういう機運をつくっていくということがまず大事なのかなというふうに思っています。

教育行政の中では、健全育成会とか子ども会もそうですけれども、いろんな青少年育成団体がありますので、そういう団体が積極的に活動できるような、そんな支援を同時にしていくことが大事なのかなというふうに思っております。

- （小野澤議長） 学校、家庭、地域、一般的にも言われるけれども、青少年教育には、やはり学校、家庭、地域が連携して社会総がかりというかね、そんな取り組みをしていかなければいけないのかなと私としては考えていますね。
- （井上教育委員） 私も子ども会の状況を教育長がおっしゃられた、その20年間の表の中で、平成16年までががんと落っこちているわけですね。これはもうその当時は相当な危機感を持っていましたね。これは教育委員会も多分思っていたと思いますし、地域の方も持っていた、保護者も持っていた。子ども会の数がどんどん減って16年まで落ちて、そこから10年間が子ども会の数としては、何とか維持されているというところにちょっと注目をしていましたけれども、子供の数が減っているので、加入している数が減るのは当然なことで、これはある程度仕方がないんだという部分もあります。加入率の問題は当然ありますから、これは

高めなくてはいけないけれども、その表でいくと、この10年間の流れの中では、何とか現状を保っているというふうに見たらいいのかなというふうに思うんです。これは恐らく表面に出ないけれども、愛子連の方々が相当な努力をしているというふうに私は思っています。これは恐らく何もしなかったら、この現状がずっと10年間も維持されることは多分なかったであろうと。いろんなさまざまな地域の中での取り組みが一つの成果を持って現状維持をしているということですから、一番いいのはまた右上がりにつと上っていくのが望まれるのですけれども、何とか今後、こういう地道な取り組みだなどと思うんですけれども、続けていていただいて、この状態を続けて、地域の期待を込めてお願いしたいなというふうに思っております。もちろん教育行政の部分でも相当な支援が必要だと思いますけれども、私はそんな見方をして、随分頑張っていたらいいんだなというふうに思いました。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

○（榮利教育委員） 愛子連の実際の変革のときに私は立ち会ったんですけれども、やっぱりそのときから愛川町には人づくり基本構想というのがありまして、その中に地域の子供は地域で見守り地域で育み、地域で育てましよう、ということがずっと流れてきて、その愛子連の変革で組織を一般的にわかりやすく変えたことが、今の井上委員さんの話の中にもありましたけれども、ずっと継続しているのかなというふうに思っているんです。これからどうしていくかという話は、私はもっとPRをしてほしいなど。それぞれふれあいレクリエーションでもそうですけれども、各小学校でやっている活動なんか地域の特徴を生かして、ここまで来ているわけですね。ですから、もっと少しPRをしていただければ、親御さんの参加も多くなるでしょうし、地域の参加も多くなるんじゃないかなというふうに思うんですね。

そういう中で、事務局にちょっとお尋ねしたいんですけれども、ふれあいレクリエーションの内容の決め方というのはね、各小学校でいろいろ苦勞していると思うんですけれども、どういうふうにやられているのか、ちょっとお伺いしたいと思うんですけれども。

○（瀧生涯学習課副主幹） ふれあいレクリエーションの内容についてなんですけれども、愛川町子ども会連絡協議会、愛子連と呼ばれる組織が中心となって各6校ございますけれども、そちらに行きまして学校さん、それから育成会、スポーツ少年団とか、そういった団体さんと協議を重ねて、運営委員会的なものがそれぞれの学校、ふれレクの前にありまして、そこで協議をしてこういった内容にしていこうということで決めていただいている形です。いずれにしても、子供たちと地域の方、高齢者の方の触れ合いを大事にしながらという考え

で、内容を決めていただいているという状況です。

○（榮利教育委員） どうもありがとうございます。

各小学校で名前も違いますよね。みねっ子フェスティバルにしたり、ふれあいレクリエーションにしたりね。ことしの参加率はどうなんですか。大体500名とか、学校によっては少ないところもありますけれども、11月にやりましたよね。その状況はどうですか。

○（瀧生涯学習課副主幹） 例年6校合わせて2,200～2,300人ということで、参加いただいているんですけども、ことしは報告の数が2,400を超えていますので、少し例年よりも多くの方が参加されているという状況です。

○（榮利教育委員） どうもありがとうございます。

先ほど言ったように、ホームページに出ていますけれども、もっとそういう内容を学校だよりも載せるとか、もっとPRしたほうがいいかなと私は思うんですね。もっとみんなに知ってもらったほうがいいと思うので、それをちょっと検討していただけたらいいかなというふうに思っています。

○（小野澤議長） では、周知PRのほうをよろしくお願いします。

○（佐藤教育長） よろしいですか。

○（小野澤議長） どうぞ。

○（佐藤教育長） 今年のふれあいレクリエーションでは、3校の小学校を回らせていただいたんですけども、学校によっては午前中授業をやって、午後からというところもありました。そういう学校はほとんど100%に近い状態で参加しているというふうな状況があって、これは賛否両論あるんだとは思いますが、3校を見ていて、子供たちの姿を見るとすごく生き生きと楽しそうに活動をしておりました。やはりそういう子供たちが活動する場というのは、確かに子供が自主的に参加するというのが大事なんだと思うんですが、やっぱりああいう大人との触れ合いの姿を見ていると、より多くの子に参加してほしいなという思いになりました。いろんなブースがあって、こま回しをやったりとかけん玉をやったりとか、本当にそういう中で、お互いに交流しながら、子供たちが生き生きしている姿というのは、やはり大切なことであると、そんな思いになりましたので、多くの子が参加できるような体制をとることが大事なのではないかと、改めて思いました。

以上です。

○（井上教育委員） これは、ふれあいレクリエーション、町の青少年事業の取組みということで今日は出ていますけれども、これは本来、各学校でどの学校でも取り組んでいる内容

だと思っんですね。だから、地域の子供たちが地域の高齢者の方と触れ合う、地域の大人と触れ合う、そんなのはもうずっと昔からもやっていることで、それぞれの学校がいろんな工夫をして、これは取り組んでいたと思っんです。もちろん愛川町だけではなくて、ほかの自治体でもみんないろんな学校でこれは取り組んでいる内容です。ところが、これが町の青少年事業の取り組みということで、今ここで出てきたのは、当町の教育委員会が主導をして働きかけて町全体の取り組みとして位置づけできました。そのときにそれぞれの学校にいろんな地域事情がありますから、地域の状況によって取り組んでいる内容ですので、いろんなパターンがあるわけですよ。それを町でやるから、全部同じにしましょうと、同じやり方にしましょうということでやったのではなくて、それぞれの地域の特色を生かしたやり方をそのまま残した上で、主体となることを愛子連のほうに委託してきたと、お願いをしてそれぞれの学校で運営委員会をつくっていたということなので、今その流れが多分ずっと来ているんだと思っんですね。

だから、こういった町全体の取り組みになっているところにやっぱりすごく特徴がある事業だと思っます。これは統計をとったわけではないのでわかりませんが、恐らく相当少ないと思っます。こういうやり方でもってこういうふれあいレクリエーションのようなことをしているところというのは余りない。それはなぜかという、やっぱりいろんなファクターがあるんだけど、一つはその規模ですよ。町の規模だからこれができた。それから、町のこの状況、それぞれの地域の状況はそんなにひどく違わない。多少の違いはあっても、そんなに違わないという状況が町全体の取り組みとして今きちんとした取り組みになっているというふうに思っますので、そういう意味では、本当に愛川町にそういう事業ができてよかったなというふうに思っますので、今後さらにまた発展をしていったらいいなというふうに思っています。

○（小野澤議長） 井上委員さんは、よく成り立ちもよく知っておられますからね。ありがとうございます。

○（梅澤教育委員） 冒頭に町長より、青少年教育は非常に難しい、曖昧としている領域であると。同感です。よく学校、地域、家庭というふうに言われますが、もちろん学校が一番制度化された学びの場である、これはもう誰にとっても疑いのない事実だと思っます。

一方で、やっぱり家庭や地域でも子供は教育をされなければならないし、その教育スタイルがしみ込み型教育であるということにポイントがやっぱりあるのかなと思っます。何となく親の癖や行動様式がしみ込んでいってしまう。極端な話、本をよく読む親の家の子は本を

読みますし、厳しい場合は虐待されて育った子は自分も親になった場合に、やはり虐待をしてしまう確率が高くなる。そういうしみ込み型の場であると。

地域社会がなかなか分断してきてしまっていて、地域全体で子供を見守るということが、ちょっと減ってきているのが正直残念な社会変容かなと思っています。先ほど社会教育主事からの話がありましたとおり、やはりこの地域でやるべきことは人とかかわることの価値を学ばせること、具体的には先ほど社会性の育成であるという話があったと思うんですが、やはり単純に社会性がどのくらい育ったということを数値化することは難しいと思うんです。しかしながら、人とかかわることの心地よさを経験させる場、それはどのくらい準備するかということは、やはり我々の立場にすごく任されてというか、我々の立場としてしっかりやっていかなければいけないことかなと思います。

といった意味で、今、井上委員がおっしゃったとおり、一部そういう制度化したそういう社会教育の場、ふれあいレクリエーションであったりというのをしっかり設置をしていくこと、それは非常に重要だなと思いながら聞いていました。その社会性を育みつつ、徐々に社会を構成していく力、社会構成力といわれたりしますが、自分たちが心地のいい空間を味わいながら、何となく今度は自分が親分のような立場になっていく、リーダーのような立場になっていく、今度は自分が上の立場に立ったときに、自分の後輩たちに、あるいは自分が大人になったときに自分の子供たちという、その役割分担がなされているといいなと思いつつながら、私は聞いていました。

そういったものを制度化されたものの中にジュニアリーダー制度というものがあるかなと思いつつ聞いていました。これはいわゆる子ども会の中でリーダー的な役割を制度化して育てていこうとする、そういうシステムかなと考えます。このジュニアリーダー、22名いるというふうに先ほど資料があったんですが、これがふえてくるのが非常に制度化された地域の学びとしては非常にいいことかなと思うんです。このジュニアリーダーの呼びかけ方というのか集め方というのか、そういうのがあったら教えてください。

- （瀧生涯学習課副主幹） 愛川町ジュニアリーダーズクラブですけれども、呼びかけの方法としては、1つには学校さんをお願いしていることです。年度末、年明けて2月とか3月ぐらいに各小学校、中学校に募集の応募のチラシのほうを配布していただいて、そこで興味を持ってもらった子が入ってもらうということが1つ。

もう一つは、やはりジュニアリーダーズクラブ、1年間、年間通してさまざまな活動をしております。先ほども紹介しましたけれども、わくわくホリデープラン、子供たちの自主事

業ということで、今年はピザづくり、それからカヌー教室、この12月にはジュニアフェスティバルということで、農業改善センターですかね、そちらのほうでお祭りのほうをいたしました。そういったところで参加をする子供たちに、やはり直接自分たちがこんなことをやっているんだよ、頑張っているんだよということをアピールする。アピールしてその姿を見てもらって一緒にやっついていこうよという、そういう気持ちになってもらえるようなジュニアリーダーになってほしいなというのが、我々の気持ちであります。

また、最近では先ほど説明しました県外交流事業、立科町にもジュニアリーダーの指導者ということで中学生のリーダー的な存在ということで、高校生なんかジュニアリーダーで行っているんですけども、その子供たちが中学生を引っ張ることによって、その中学生が県外交流事業の後に参加する、一緒になってジュニアリーダーをやるという形も少しふえてきております。

○（梅澤教育委員） すばらしい広め方で、まさに自分の背中を見せて、そういう背中に憧れた後輩たちを教えるという形ですばらしいなと思いつつ、今聞いておりました。

地域のクリスマス会にそのジュニアリーダーで行ったりするというお話が先ほどあったんですが、ぜひそういった場面でも積極的に子供たちに直接声をかけるような形で、いい後輩育成をしてもらえるといいかなと思いました。

その子ども会のクリスマス会とかで派遣すること自体が多分僕はすごく価値があることだといって、先ほど親の都合でなかなか子ども会の役員になり手がいない。親が嫌だから、面倒くさいから子供を子ども会から外してしまうという、ちょっとその悪循環を断ち切るためにも、つまり親御さんの役割、負担を軽減させるためにも、ぜひこういうジュニアリーダーがふえていって、その子供たちが楽しいことをやり、いい背中を見せるという、好循環への変革、変容のきっかけにさせていただけるとすごくうれしいなと思っています。

以上です。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

○（平田教育委員） ジュニアリーダーと聞きますと、どうしても学校関係のそれなりの優秀なというか、その辺のお子さんたちがイメージとして上ってくるんですけども、例えば中学校の生徒会長さんとか小学校もそうなんですけれども、そういうある程度のお子さんたちへの声かけで学校のほうにお願いしているんでしょうか。その辺をちょっとお聞きしたいと思います。

○（瀧生涯学習課副主幹） 全くそういうことじゃなくて、リーダーという言葉がついていま



すので、そういうイメージは湧いてくるんでしょうけれども、よくそういった思いを持って見ておられる方もいるんですけれども、もちろん学校の中で中心的なお子さんもいらっしゃいますけれども、やはり逆にそういった場面で人前に立つのが、話すのが苦手なお子さんもいらっしゃいます。でも、何年かそのジュニアリーダーズクラブと一緒に活動していく中で、その子なりの成長というのがやっぱりあると思うんですね。学校でもそうですけれども、その子がジュニアリーダーズクラブで培った力がどんどん増していけば、もうそれはそれですばらしいことだろうかと思えますので、人それぞれさまざまな状況ではございます。

- （平田教育委員） たまたま私が知っているジュニアリーダーのお子さんがある中学校の生徒会の会長をやっているんです。それだったのでちょっとお聞きしたんですけれども、いろんな子たちが率先して、あるいはおまえやれよと声かけをされてきているのかもしれませんが、そういうお子さんたちが地域に入って、どんどん活発にして、いろんな意味で一人一人が成長していくという中が一番じゃないのかなと思えます。それと、最終的にはその子たちが成長し、愛川町の一つでも大きな役割を果たしていくような子たちになってくれば、人間PR、動くPR、そういうふうな形になるのが一番いい形かなと思えます。

それで、一番上のお子さんは大体何歳なのでしょうか。ずっといらっしゃるお子さんもいらっしゃるんですね、長い間、あのお子さんたちは何年来のお子さんなんでしょうか。

- （瀧生涯学習課副主幹） もうジュニアリーダーズクラブがことし13年目なんですけれども、一番上のお子さんはもう二十歳を超えていまして、小学生ぐらいから、中1ぐらいから入っているので、13年を足すと24、25歳の方が1人いらっしゃっております。
- （平田教育委員） 大体、顔と名前が一致します。そのぐらいの年代かなと思えますので、じゃこれからも頑張って、よい機会を子供たちにもっともっと与えていただいて、これからの愛川町の子たちが成長するとともに、先ほども申し上げましたけれども、PRをしていただくような、そういうような形でお願いしたいと思います。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

○（榮利教育委員） よろしいですか。

○（小野澤議長） はい、どうぞ。

- （榮利教育委員） ふれあいレクリエーションもそうですけれども、ジュニアリーダーも私は実際に携わったので、何ていうかな、今のPR、さっきから言っていますけれども、PRというのは非常に大事で、ジュニアリーダーをつくる時も青少年育成会とかいろんな学校の関係とか、青少年指導員が入っていたので非常に連携がとりやすかったんですね。ふれあ

いレクリエーションもそうですけれども、最初は中津第二小の子ども遊び塾から始まって、それをじゃ全体に広げようということで、青少年指導員がかかわってやっていたんですね。ですから、そういうことを踏まえながら、今言われたように、自分で勉強するのも大事ですけどもね、それを多くの方に知ってもらおうということをやっぴり基本においてやったほうがいいような気がしますけれども、それは事務局にちょっとお願いしたいんですけれども。

以上です。

- （佐藤教育長） 教育長に就任してから2度ほどジュニアリーダーの子供たちが活動している場面を見学させていただきました。一つは中津地区の健全育成会の芋煮会ですが、八菅橋のたもとでありまして、そのときに愛川町出身の高校3年生の子がジュニアリーダーをやっていて、小学1年、2年、3年生ぐらいの子たち30人ぐらいを本当に一生懸命に、てきぱきと指導している姿があって、これは大人がやるよりいいなと、正直そう思いました。現在は、都合で海老名に住んでいるということでしたが、また戻っていらっしゃいと言いました。やはり先ほど梅澤委員さんが言われたように、ああいう姿を見て恐らく子供たちも感化されるものがたくさんあるんじゃないかなと思いました。

ですから、お姉さんという形になるんですけれども、すごくその姿を見ていいなと思いました。その子に本当にお礼を言ったんですけれども、これから受験だと言っていました。教員志望だというから、本当に愛川町にいらっしゃいね、と言ったんですけれども、本当にああいう前向きな姿というのは、すごくいいなと思いました。

もう一つは、この前の12月6日のフェスティバルに行かせていただいて、そのときは50名ぐらいの子供たちが参加していました。自主的に参加したいという子が場所が場所だったので、親御さんがほとんどついてきてくださったようなんですけれども、半分ぐらいのジュニアリーダーの方がいて、あと着ぐるみを着た人は、かなり年齢の高い。わざわざ私が帰るときに、着ぐるみを脱いでお世話になりますという挨拶をしてくれたんですね。お話を聞いたらもうずっとやっていて、このフェスティバルには毎年来ているんだと。着ぐるみを着て今回すごい暑い中、もう汗だくで着ぐるみを着て一生懸命やってくれていました。

そういう中で、青少年指導員さんの方にジュニアリーダーのことを聞いたところ、ある子なんかは先ほど平田委員さんが言われたように、全然学校では目立たない子だったんだそうです。その子が小学校のときにインリーダー、そして中学校でジュニアリーダーを経験していく中で随分変わってきた、また成長したという、そんな子も実際にいるということで、やっぴり子供たちの気持ちさえあれば、そういう中で磨いていけるのかなと。一つ一つのゲー

ムもそうなんですけれども、どうぞ入ってくださいと言われて、私も一緒になって活動させていただいたんです。ゲームのワイパーなんて私はできなかったんですね。これをやるんですよ。練習しました。一生懸命練習したんですね。子供たちは早いので、かなりの子ができるんですけれども、やっぱり50名いるとできない子もいるんです。やっぱり寂しそうな顔をしているんですね。自分もできなかったので、寂しい顔をしていたんですが、私は家に帰って一生懸命お風呂で練習したらできるようになりました。やっぱりああいうゲームを教えられて、ずっとできる子はすごく楽しいんだろうなと思いました。

- （榮利教育委員） グーパーというのもありましたね。
- （佐藤教育長） ありましたね。
- （榮利教育委員） これを交互に出していくのが。
- （佐藤教育長） ワンというのもありましたね、これもありましたけれども、やっぱりそういうゲームを通して子供たちが和やかな雰囲気になって、そうしたらすごくいいなというふうに思います。

ですから、あれでまた自分もやってみようとか、そういうリーダーの人たちと、今度はリーダーは小学校や中学校へ行くと、そこでまたリーダーをしてくれるので、そういうリーダーというのを育てるということは、今学校教育ではすごく大事にしている部分なんですね。ですから、そういうふうに広がっていけばもっといいなという、そんな思いで見学をさせていただきました。

以上です。

- （小野澤議長） じゃ、教育長に今度は指のほうを教わります。  
えんでこ祭りもあれでしょう、ジュニアリーダーの皆さん、一生懸命やっておられて、私もえんでこ祭りに毎年行っていますけれども、盛り上がっていますね。それで交流のほうも随分お互いの交流が深まって、すばらしい事業だと思いますけれども、参加者の何か感想みたいなのをまとめておられるのでしょうか。事務局では毎年、何か資料を作っているんですよ。
- （瀧生涯学習課副主幹） 教育委員さんには10月の委員会のほうでお渡ししておりますけれども、毎年交流が終わった後に、このような冊子のほうをつくってございまして、写真や感想文などを取り入れて作成して子供たちのほうに配付をしております。
- （小野澤議長） それで、うちのほうから一方的に行っているわけじゃない。これはもう何年ぐらい続いているの。

- （瀧生涯学習課副主幹）　　ことしで22回目になりました。
- （小野澤議長）　　それで、立科と締結したのが昭和62年2月だから、友好都市はね。じゃそのあとはもちろん。それでずっとこっちから一方的に行っているだけでしょう。
- （瀧生涯学習課副主幹）　　そうですね。
- （小野澤議長）　　あれは向こうからこっちへ来られてこういう交流をしているというのはあるの。
- （井上教育委員）　　1回ありましたね。
- （小野澤議長）　　そうかね。だから、そういうのもね、お互いにね。
- （井上教育委員）　　本来はそうですけれども、なかなかやっぱり向こうの事情みたいで、いろんな条件が整わないのかもしれないけれども、機会は少ないですね。でもゼロじゃないです。
- （小野澤議長）　　向こうもあれか、オレゴンと姉妹都市を結んだからかな。
- （梅澤教育委員）　　私ごとで大変恐縮なんですけど、うちの息子が今年度のこの県外交流に参加をさせていただいておりました、帰ってきてから大変楽しかったと、本当に感想を言っておりました。親に似てなかなか手厳しいことを言う子なんですけれども、非常に楽しかったというね、率直な感想で。これが一つはやっぱり自分の学校だけじゃなく、町内のほかの中学生と仲よくなれたこと、そしてやっぱり向こうの交流先の立科の子供たちと仲よくなれたことが非常に大きかったのかなと思うんです。
- やっぱり残念なことといえば、それが双方向にならないこと。やっぱり行って終わってしまうということはやっぱり残念だなということは話していましたね。多分今の子供たちなので、LINE-IDとか多分交換していると思うんです。なので、文通というよりも多分そういったつながりがあって、新しい形のつながりになるのかなと思うんですが、なかなか実体験としてこれ以上会う機会が多くならないのが、ちょっと残念かなと。一方でそういうところでつながり続ければ、もうちょっと大きくなってから自分たちであるいは親がうまく支援することによって、直接的なつながりもまだし続けられるのかなと思いついておりました。
- （小野澤議長）　　だから、相互交流とかね、やっぱり必要だよな。
- （梅澤教育委員）　　あるとうれしいかなと思いますね。
- （井上教育委員）　　これについては、私もね、平成15、16年にちょっと携わったんですけれども、まず当時の状況と多分今の状況はそんなに変わらないと思うんですけれども、2泊3日

の中で子供たちが変わっていくといいますかね、たった3日間なんだけれども、変わっていくというのをやっぱり目の当たりにしています。結局、子供って全く知らない中にぼんと一人で入れられる状況というのは、余りないんじゃないかと思うんですね、日常生活の中で。ところがこの県外交流は、町内の中学生同士も知らないし、もちろん知らない、知っている子もいますが、知らない子だし、ましてや立科という全然違うところの中学生も全く知らない、知らない者同士を一つの空間にぼんと入れるわけですね。それも最初に会ったときの子供たちの雰囲気をこういうふうに見ますと、2日目、随分変わりますね。最初は物すごく何か話しかけたいんだけど話せない。気になるんだけどもかかわれないみたいな雰囲気を一人一人がみんな持っているわけですよ。そういうふうなのを外からこうやって見えますとね。大丈夫かなと思ってしまうんですけども、それが1日終わり、いろんな事業をやりますよね。活動しますよね。その活動していく中でどんどん距離がだんだん縮まっていくというのが、もう目の当たりにわかる。2日目になって相当仲がよくなって、3日目にはお別れが悲しくなるほど、涙を流すほど仲よくなる子も、もちろん差はありますよ。全員がそうじゃないんだけど、そういうふうなものが、その3日間の中で見られるということが、この事業の中では最も大きな成果だというふうに私は思っています。

子供がここに参加することによって、いわゆる社会性と出ていますけれども、社会性の勉強をしたり協調性の勉強をしたり、あるいはそこで自己発見の場でもあるわけですね。こういう機会というのは、ほとんど多分ないだろうというところでもって考えると、この事業ということの持つ意味はとても大きい。はたから見ますとね、これは22回目で内容はじゃどのぐらい違っているかという、ほとんど変わっていないんですよ。ずっと毎年大体同じパターンで、もちろん中の事業は少し変わっていますけれども、全体の2泊3日の流れの中では、もう余りこれ以上変えられないだろうと思っていますから、無理ないと思うんですけども、はたから見ると変わっていない。ところが参加している子は初めての子ばかりなわけです。毎年初めての子が参加しているわけで、そういう意味でいうと、もうマンネリ化しているという批判も一部にはちょっとあるような気もしますが、実はそれはそうじゃなくて、とても大事な経験を毎年その子たちに提供している、そういう場を設けているということでは、この事業はもうとても町としては、大変お金がかかっているのかもしれませんが、とても大事な事業なんでね、ぜひこれからも続けていってほしいなというふうに私は痛切に思っています。子供の変容をちょっと目の当たりに見ていたところからのお話をさせていただきました。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

○（榮利教育委員） 私が小学校のころはね、スマホなんかないし、もちろんまだ自動車も走っていない時代だったから。本当に今の子供はね、わかんないんですよ。今は、「気持ちビジネス」というビジネスがだんだんはやってきていますよね。本人の気持ちを細かに達成してくれる会社があると。今言われたようにね、いろんな青少年の活動に参加している子供たちはいろんな感動したり体験したりしていますよね。それ以外の子供たち、青少年は第一回の会議のときにも町長にお話ししたんですけれども、地域の青少年育成の活動をどうしていくのか、青少年団体の活動をどうしていくのかというのは、もっとちょっと明確にしていかなければいけないかなというふうに私は思っているんですよ。

ですから、今回、文科省と厚労省の子ども・子育て総合プランが出されましたけれども、愛川町でも子ども・子育てプランが出されましたけれども、もうちょっと具体的に働きかけていくためにはどういうふうにしたらいいのかなというのをちょっと、議員さんの質問じゃないけれども、町長にお伺いしたいんですけれども、どうしていききたいのか、こういうふうにしていききたいというのが何かあったら、お伺いしたいんですけれども、どうですか。

○（小野澤議長） 答えになるのかわかりませんが、少子高齢化、そして今人口減少という、そういう中であって急激に社会変化が今起きているわけでございますね。町としても青少年事業を含めて、いろいろな分野の施策をいかにしていくかということで、今将来を見据えたいろいろな計画づくりをしているところであります。そうした中で、町としては高齢者の皆さんが元気でいつまでも長生きをしていただくというようなことで安心して暮らせる、そうしたまちづくりを念頭に置きたいと。そして若い人たちには、いつまでもこの愛川町を愛していただいて、住み続けていただくと、そういうもっと町の魅力を感じてもらえるようなまちづくりにしていかなければいけないのかなと、そんな思いの中で今地方版の総合戦略、それも今策定をしております。

これは来年の2月にでき上がりますけれども、今委員さんともこれから協議もしますし、推進委員会とも今協議はこちらのほうは終わりましたけれども、これから委員さんのほうといろいろ協議を進めて最終版としてまとめていこうかなと、そんな思いでございます。何と言っても地域が元気になるには、若い青少年が元気に活躍をしていただくこと、これが源泉であろうかなと思っております。将来の愛川町を担っていただけるような、町としても人材育成に取り組んでいきたいなど、そんなふうに思っているところでございます。

答えになっているのかわかりませんが、ありがとうございます。

いろいろご意見も出ましたけれども、先だって放課後児童クラブとかわせみ広場、こちらのほうの現場を見させていただきました。施設の中で子供たちが安全で安心な場所で、伸び伸びと指導員さんの温かい見守りの中で育まれているなど、こんな感じを受けたところでございます。何か教育長も一緒に参りましたけれども、佐藤教育長から、その辺の感想はございますか。

○（佐藤教育長） 過日、かわせみ広場と児童クラブを見させていただきました。

なかなか時間がない中で、まだ全てを見ているわけじゃないんですが、第二小の児童クラブとそれから春日台児童館のかわせみ広場を見させていただいたんですが、ともに子供たち、そこに集まっている子供たちはすごく楽しそうでした。ちょうど第二小の児童クラブは3時過ぎだったので、スタートしてこれからおやつを食べるときだったんですね。ざっと30人ぐらいはいたんでしょうかね。子供たちが指導員さん2人で指導されている状況があったんですけども、やっぱりそういう放課後の子供たちが本来であれば来学校が終わって家に帰る。でもそこに保護者の方がいらっしゃらないケース、そういう子供たちがそういう安心して生活ができる場というのは、とても大切なことだなというのを、何か改めて感じました。

今、女性の方が働いているケースが非常に多くなっている状況下があるので、兄弟が何人かいればまた違うんでしょうけれども、兄弟が少ないケースも今多くなっていますし、そういう中で人と交わっている子ども達の笑顔を見ると、とても大事だなというのを感じました。かわせみ広場のほうは、人数はそんなに多くなかったんですね。10名を切っていたんでしょうか。ただ、ちょうど入り口のところに男の子がゲームを持って、アーケードみたいな形になっているところがあるんですが、そこで10人ぐらいの子供が中に入らないでゲームをしていて、寒いから中に入ったらというようなことを言うと、男の子たちが来て、畳の上で今度はゲームをやっていました。とてもにぎやかな雰囲気の子供たちが活動していて、女の子は何か椅子に座って2人で何か楽しそうに自由なことをやっていたけれども、何かそういうやっぱり居場所をつくるということはすごく大事なのかなという気がしました。

やはり、一人でいるというのは多分つまらないことで、当然そこに友達同士が集まり、でも友達の家に行ったりということがなかなかできない状況の中で、やはりどこかで集まって、そこで遊んだり話したりゲームをしたりということが、子供たちにとってはとても大事だと思います。やっぱり今はこういう状況ですから大人がいて安全が保たれるという、そういう場というのは当然必要なことであると思います。多くの子供たちが活用してくれればいいなと思いました。

以上です。

- （小野澤議長） ありがとうございます。

どうぞ、井上委員さん。

- （井上教育委員） 先ほど事務局のほうから放課後子ども総合プランの推進にかかわって、放課後児童クラブとかわせみ広場との連携ということで説明があったわけですがけれども、私その両方を見て、今、町の状況を考えたときにできるのかなど。こういった内容の連携ができるのかなという、ちょっと疑問に思うし不安にも思うことがあるんですけども、それは可能なんでしょうか。

- （小野澤議長） では、生涯学習課長。

- （片岡生涯学習課長） 生涯学習課長でございます。

先ほど画面の中でも放課後児童クラブとかわせみ広場の違いにつきましてご説明いたしたんですけども、確におっしゃるとおり、私ども事業の趣旨ですとかあるいは実施場所ですね。こういう現状を考えますと、すぐに一斉に連携を図るということは、ちょっと課題が少なくないなと思っております。例えば放課後児童クラブというのは、全て小学校の敷地の中でやっています。一方のかわせみ広場は地域の児童館、町内14カ所に点在した形で実施しておりますので、それをどう連携していくかというのは、まず場所の問題というのもございますね。それとかプログラムを検討したり全体調整を行ったり、そういった人材というのも必要になってくるのではと思っております。ただ、そういう課題があることはあるんですけども、国の放課後子ども総合プラン、それからそれを受けて3月に策定した愛川子ども・子育てプラン、この中でも平成31年度までに2つが連携したプログラム、これの実施について記載をしておりますので、今後実施に向けた検討をしていこうとは考えております。

以上です。

- （榮利教育委員） 教科書どおりの答弁みたいであれなんですけれども、実際にほかの市町村をいろいろ調べると、大体町で委託しているところと、それから民間に全部やっているところいろいろさまざまなんです。金額もいろいろ違ってまして、愛川町と同じ規模くらいですと、寒川町なんかは放課後子ども総合プラン運営委員会というのをつくって、その中で寒川学童保育会というのをつくって、そこで5カ所の小学校内で運営していますよね。そういうのとか、あと大和市なんかは、もう最近これは変更なんですけれども、1年生から6年生まで全部利用ということで、26カ所、これも公営であったり民間であったり、委託してやっているところがありますよね。それから大磯なんかは学童保育クラブというのをつく



って、それは社会福祉法人が全部面倒見ている、そういういろんな形であるので、これから検討していくと思うんですけども、私はとりあえずは子供たちの居場所をつくってあげよう。それが今非常に大事だと思うんですよ。それはどういう形になるかはわかりませんが、そういうことを考えて、居場所をつくってあげるんだとしたら、愛川町ではこんな形がいいねとか、そういう方向で検討していただければいいかなと思うんですよ。

新たに資格制度もできましたよね、ことしの4月から。今までは指導員という名前だったんですけども、放課後児童支援員という資格制度ができて、それも資格を取れば大変なんですけれども、面倒が見られるというふうになりますので、それもきちっとやっぱりこれから検討してやっていただきたいなというふうに思っています。

以上です。

- （梅澤教育委員） その支援員の、支援員になるべく単位をどうするかというところで、ちょっと意見を求められた経験がありますので、実はこの支援員の資格って、全然法的な根拠が全くない状況で今のところ進んでいるのが現状で、何単位を取ればいいのか、何時間ぐらいの研修を受ければいいのかというのが大阪のほうだったり横浜のほうだったり、先進自治体では結構ばらばらな状況で今進んでいるのが現状かなと思うんです。

しかしながら、いわゆる安心して保護者が委ねられる場所となると、ある程度のそういう資格でなければいけないと思うので、この31年までの間に他の自治体の榮利委員のおっしゃったとおり、実際は動向をよく踏まえた上で、どのような方にそこの支援者になっていただくのか、その支援者の資格として、この程度必要ですということをやっぴりある程度町として明確に持っている必要があるのかなというふうには思います。

榮利委員のおっしゃった安全安心の場であるということは、私も本当に大前提だなというふうに思っています。それがあつた上でいわゆる居場所が保障されていること、安全が保障されていること、加えて現在の放課後児童クラブにある生活指導的なものが多分、ただプラスになると。つまりかわせみ広場と放課後児童クラブが合わさると、多分そこだけだと思うんですが、どうやら社会情勢的にそこに学力の部分がほんのちょっと入ってきそうだなと、横浜の話を聞いていると思います。そこを制度化し過ぎると居場所感が減ります。正直居場所が減る。そんなところなら行かないよ、行きたくないよという子もあります。だから、その辺のバランスをどうとるかとかを、今後の研究材料にさせていただけるといいのかなと思います。

以上です。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

井上委員。

○（井上教育委員） 先ほどできるのかな、どうかな、可能かなということでもってちょっと質問させていただきましたけれども、当然これから事務局では考えていると思うんですけども、できるところからやっていくという方法ですね。町内全部に一斉にばんとやっていくということは、まず無理、まず不可能だと思いますので、今は具体的に言うと田代小学校なんかでいうと、もうかわせみ広場の場所と児童クラブの場所がほとんど近いわけですから、ああいう場所的な問題ではまずクリアできる場所かなとちょっと思いますので、ぜひ近いところから具体的な内容を検討して進んでいただければと思います。

以上です。

○（小野澤議長） 大分時間のほうが押してきましたけれども、時間はどうでしょうか。

○（佐藤教育次長） そうですね。一応11時半ごろを目途にですね。

○（小野澤議長） それでは、何かここで皆さんのほうからどうしてもというような発言があれば、お願いをしますけれども、よろしいですかね、（1）についてはね。

皆さんのほうからいろいろお話をいただきながら、地域の子は地域で育てるといような言葉のように、子供たちが学校、そして家庭では体験できないことを地域の中で体験をして、多くの友達、そして大人たちと触れ合うと、そういうことで社会性、協調性を身につけてもらいたいなど、そう思っております。行政としてもこれから教育委員会と連携をしながら、さらに向上に向けて進めていきたいと思っております。

いずれにしても、子供たち、将来を担う宝でございます。家庭、学校、地域、全体で支えて、弱った子がいれば大人がそれに寄り添うというようなことが大事であろうかなと思っております。そんなことで、この（1）の本町の青少年の教育の現状、これからについては締めさせていただきたいと思っております。

---

○（小野澤議長） 続いて、（2）のその他で皆さんのほうから特にということであれば、発言をお願いいたします。何かございますか。

○（榮利教育委員） お金の話で恐縮なんですけれども、今財政のほうも予算に取り組んでおられると思うんで、教育行政に関する予算の全体とかを、大まかでいいんですけれども、それを考えも含めてお話しただけならと思いますけれども、いかがでしょうか。

○（小野澤議長） 榮利委員から、今、財政のことということで質問を受けました。

ご案内のように、今予算編成に努めているところでございまして、今事務レベルの予算折衝をしているところでございます。ちなみに先ほどお話に出ました放課後児童クラブ、それとかわせみ広場、これを合わせると今事業費は4,600万円ぐらいに年間かかっていますよね。そのうち町の持ち出しが国と県の補助金をもらっていますので、約2,000万円ぐらいが町からの持ち出しだと思っております。財政見通しでございすけれども、ご案内のようにこうした状況の中で個人町民税、この減収は避けられないのかなと思っています。

それとあと、法人町民税についても一部国有化の影響が出てきますので、そちらのほうも減収が見込まれるということでございます。さらに地方交付税も本年度愛川町27年度交付団体ということでもらっていますけれども、28年度も多分交付団体になる見込みですから、このままいくと。そうすると地方交付税全体がもう減額されますので、その辺の影響もあるなということ、歳入全体では相当厳しい予算編成になるのかなと思っています。

そして、ご案内のように、歳出については福祉、介護、教育、防災、保健、いろいろあるわけですよね。そうした中で、歳出のほうは社会保障関係経費が毎年膨らんできているところでございます。さらには小学校、中学校のエアコン、今実施設計を27年度進めておりますけれども、この辺も早期に着手をしなければいけないということで、これも相当の経費がかかります。ですから、今いろいろと教育委員会のほうで補助金の関係とか起債の関係、いろいろ調査をしているところでございまして、財源をいかにしたらいいかなということで、今教育委員会のほうはなかなか頭を痛めているのかなと思っております。

そうした中で、総体的には予算規模は27年度と同じぐらいの117億、118億、一般会計の総予算はそのぐらいになるのかなと見込んでおりますけれども、できる限り選択と集中、そうしたことで計画を立てていきたいなと思っておりますし、財源のほうもしっかりと国・県の財源を獲得していきたいなと、そんなふうに思っています。

そして今、榮利委員のほうからのせっかくお話が出ましたので、じゃ医療費なんかはどのくらい今町ではかかっているのよというようなことで、せっかくの機会ですからお話をさせていただきたいと思っています。

まず、後期高齢者75歳以上の関係ですが、1人当たりの医療費はここ数年横ばいですがけれども、愛川町では1年間で78万かかっています。それで全国では平均91万ですね。県下の平均が86万5,000円ということでございますけれども、75歳以上の1人当たりの年間の医療費、これが78万もかかっているんですよということですね。そして国保健康保険、この被保険者は今町民の34%ですが、約1万4,000人ぐらいおられますけれども、この医療費、1人当た

り年間23万5,000円かかっています。ですからその1万4,000人ちょっと掛けると年間では国保の医療費は35億円かかっているんですね、愛川町で。ですから、医療費だけでもそれだけかかっているということで、なかなかこれからは何ていうのかね、元気な高齢者をつくっていく、健康寿命を延ばしていく必要があるのかなと、そんなことも考えているところがございます。

以上であります。

○（榮利教育委員） どうもありがとうございます。

今、お話しを伺った中で非常に厳しい財政ではありますけれども、やはり青少年にかかわる予算は、継続は力なりという言葉がありますとおり、継続していただきたいなど。最近気づいたんですけれども、町もやっとな街灯をLEDにかえましたね。私は川北なんですけれども、LEDに全部かわっているんですよ。もうすごく明るくて、私はサラリーマンなんですけれども、うちの会社はもう3年前に全部LEDにかえました。この間、話をしていたんですけれども、町はLEDにかえないのという話をしたんですけれども、やっぱりそういうところもきちっと将来を見据えて予算を入れていくと。青少年教育も将来を見据えて予算を入れていくということをぜひお願いしたいと思いますが、よろしく申し上げます。

○（小野澤議長） ありがとうございます。

LED化については、今防犯灯、町全体で4,700基ございます。これを国の補助金も獲得できたので、早速12月1日から各地区を今順次LEDに取りかえていますので。

○（榮利教育委員） すごい明るいですよ。

○（小野澤議長） ええ、明るいですね。私もこの前そう言いましたけれども、川北のほうはなかなか早く電気屋さんがやっておられますね。今8業者に分かれて順次やっていますので、あれは全部かえますので、ありがとうございました。

それと、青少年教育の経費ですけれども、またこの辺はしっかりと継続してやっていきたいなど。また、教育長のほうから強い要望があろうと思うんでね、予算上はまさにしっかりとやっていきたいと思います。ありがとうございます。

○（井上教育委員） 大変厳しい財政状況というのは、よく理解をしております。医療費削減で足を引っ張っている私が申し上げるのは大変申しわけないんですけれども、ぜひこのような中でも教育予算の充実についてはお願いをしたいというふうに思います。前回も申しあげましたけれども、毎回申し上げたいと思いますので、よろしく申し上げます。

○（小野澤議長） 重ねてありがとうございます。

○（梅澤教育委員） 最後に要望になってしまって恐縮なのですが、前回大綱の冒頭に入った「愛川をいつまでも愛する人」のためには、やっぱり愛川の教育を受けてきてよかったという、その青少年教育に尽きるかなと思うんです。一部のそういう子ども議会だとか県外交流に行く子だけでなく、全員が榮利委員もおっしゃいましたが、全員にとって本当に安全安心で、さらに何となく力がついたと思えるような、そういう教育のために少ない予算を上手に使っていただいたらうれしいなと思います。

以上です。

○（平田教育委員） 私もありますけれども、お母さんたちの声で、横浜でしょうか、川崎でしょうか、わざわざ愛川町の教育がよくて、住んでおいでになった方がおいでになります。そういう方もおいでになりますので、より一層の教育のほうには力を入れていただければと思います。

○（榮利教育委員） じゃ、私のほうから。第2回目の全体協議会がすごくよかったと思うんですけれども、やっぱり愛川町の教育関係で行っている事業についても教育にしても、非常にすぐれているとは言いませんけれども、やっけていて十分すばらしいなという青少年関係の行事が幾つもあるんですよ。成人式もそうですけれども、いろんなね。それをやっぱりきちっと継続していくことが、今、平田委員さんが言われましたけれども、愛川町に住みたいとか、愛川町の青少年教育はすばらしいねとか、そういうことにつながると思うので、ぜひよろしくお願いいたしますなど、お願いするだけなんですけど、よろしくお願いいたします。

○（小野澤議長） 全ての、全教育委員さんから教育予算に関する強い要望をいただきましたので、しっかり頭に入れておきたいと思っています。ありがとうございます。

じゃ、その他のほうもよろしいでしょうかね。

（「はい」という声あり）

○（小野澤議長） どうも、意見交換のほうありがとうございました。今日は「青少年教育」というテーマのもとでいろいろと議論をさせていただきました。時間的にも十分でなく深めるに至らない感もあったかもしれませんが、愛川町として青少年教育に関する実現可能な具体的な施策等につきましては、今後も教育委員会はもとより、社会教育関係団体の皆さん方の声も聞きながら、しっかりとやっていきたいなと思っております。

そして、皆さん方から今強い要望をいただきましたので、この辺もしっかりと頭に入れて予算編成のほうを固めてまいります。これからも皆さん方のお力添えを心からお願いを申し上げまして、閉会の言葉といたします。大変にありがとうございました。

